

12月20日1時～3時、埼玉県環境アドバイザーでエコ・リサ理事でもある上領園子さんによる講演会を大宮中部公民館にて開催しました。遺伝子組み換え作物（GMO）は、私たちの健康を脅かすと同時に農薬による環境汚染の問題でもあり、スーパーに並ぶ食品の70%特に加工品にGMO成分が入っているとのお話を聞いて参加者17名が学んだことを周りの人たちに伝えないと大変という気持ちになりました。

まず、厚労省医薬品食品安全部発行のパンフレット「遺伝子組み換え食品の安全性について」には、遺伝子組み換え技術について、従来の掛けあわせによる品種改良より時間を短縮して効率的。組み込んだ遺伝子が作るたんぱく質について体内できちんと分解しているか、アミノ酸の構造がすでに知られているアレルゲンと似ていないか確認しており、輸入の際の抜き取り検査で問題があった場合は回収廃棄などの措置をとるため、アレルギーにならないと明記。Btたんぱく質と呼ばれる微生物に含まれる殺虫成分をつくる遺伝子が組み込まれた害虫に強いトウモロコシを害虫が食べると腸に穴が開いて死ぬが、人間は胃酸でBtたんぱく質を分解し、人が食べても大丈夫と記述されているという説明がありました。



しかし、現実には遺伝子組み換え食品が流通するようになった約20年前から、世界中で遺伝子組み換え食品の栽培による問題や健康被害が出ているそうです。

遺伝子組み換えとは、AのDNAから人間が利用できそうな遺伝子を抜き取りBのDNAに組み込むこと。遺伝子組み換えのメリットは収穫量を増やし、殺虫剤を減らせると言われていましたが、現実には自然栽培の方が収穫量が多かったりすること。また、他の生物の遺伝子はそのままでは細胞に組み込まれないので微生物の遺伝子に組み込んで入れますが、本来その生物にとっては不要であるためなかなかうまく働かず、それを無理やり働かせるために、「プロモーター」と呼ぶ物質も一緒に組み込んで起動させるため、今まで働かなかった遺伝子まで「起きろ！」と働きかける結果、トリプトファン事件のような意図しない有害物質ができてしまう危険があるとのこと。

遺伝子組み換え問題の専門家として国際的に著名なジェフリー・M・スミス氏が、遺伝子組み換えによって生じる健康被害とそれをどう防ぐか、その被害からどう回復するかについて詳細な検討を行っており、そうした最新の知見をもって監督を務めたドキュメンタリー映画「遺伝子組み換えルーレットー私たちの生命（いのち）のギャンブル」から、上領さんは問題点を抜粋し、パワーポイントで説明をされました。この映画は、米国で注目を浴び、GMO食品の安全性を問う議論を活性化させ、米国のGMO反対運動に大きく貢献したそうです。

食料の中に殺虫剤が組み込まれており非常に危険

米国環境保護庁は心配無用と言っているが2012年の研究論文ではBt毒素は人の細胞にも小さな穴を開け、腸の失調現象を引き起こす可能性ありと結論づけています。

除草剤ラウンドアップを散布すると生殖異常が発生

ラウンドアップの有効成分グリホサートには遺伝毒性があり、散布された大豆畑の町では出生異常が70倍に増加。また、ラウンドアップ耐性大豆を食べたラットの睾丸が変化し精子にダメージがあり、メスのラットから生まれた子は半数以上が3週間以内に死亡。畜産業界でのGMOによる影響が大きく、犬や猫の病気が治らず獣医も手の施しようがない事例が増え、餌をGMOの入らない餌に変えることで完治し解決。牛や豚も突然病気が流行したり落ち着きをなくしたり、死亡件数が増加。GMO餌では生殖能力低下は著しい、豚の出産頭数が減少し、出生異常が発生。

除草剤は植物の栄養吸収力を阻害するので、ラウンドアップを散布した植物の栄養価は低く、弱いために病気にかかりやすくなり、それを食べる私たちもミネラル不足で弱く病気がちになる可能性がある。

モンサント社の計画

最終目的は自然界の種子をすべて排除し世界の農場が完全に遺伝子組み換え種子に依存するようにすること。そのための化学製品市場を創り出すこと。

以上、映画「遺伝子組み換えルーレットー私たちの生命（いのち）のギャンブル」から米国で起こっている遺伝子組み換え食品による健康被害は日本でも起きており、GMO食品を食べると体も小さい子供のほうが深刻な影響を受けることになります。

日本における遺伝子組み換え作物に対する規制はゆるく、遺伝子組み換えでない作物に流通過程などで誤って遺伝子組み換え作物の混入割合をEUは0.9%中国の3%よりも高い5%の混入を許しています。

遺伝子組み換え作物を避ける方法として、有機食品を選び、米国产の大豆・トウモロコシなどは避け、ペットボトルに入っている綿実油・キャノーラ油などのほとんどが遺伝子組み換え植物由来の製品なので買わないようにしましょう。



実験動物にされるのは嫌！メディアが取り上げないので若い母親はGM食品のことを知らずにいるため、GMでない食品が買えるお店のリストアップをしたオーストラリアのフラン・マレルさんなど、今、世界各地で母親たちが活発にGMO反対運動をおこなっているそうです。上領さんは、台湾のどの団体にも属していない二人の母親が、統一地方選挙の折り手紙を各地の

知事候補者宛に送り、選挙公約に遺伝子組み換え表示制度の強化を盛り込ませた結果、学校衛生法を改正し学校給食で遺伝子組み換え食材の禁止に至ったことを例に挙げて、私たち自身が遺伝子組み換え食品をなくすために、お友達とGMフリーのお菓子を食べながらのお茶会などで危険性を情報共有したり、担当大臣や消費者庁へすべての食品に表示するようはがきや手紙を出す方法もありますとお話しされました。

(報告者 大前万寿美)